



俳諧文庫
六十四

観弓集

5
1139
54



5
1139
54



所
 寶多岐才名多岐安井とあるは
 三月廿日所記に主あるとあるは
 海之傍の柳の若葉ありて其の形は
 あらむは多岐守國守通の旗と
 集や仇名とあるは多岐守通の
 通里とあるは多岐守通の通里
 十八編とあるは多岐守通の通里

志をくくハ舞を——めまを言述—
娘月士のうまを くら 以ふ
き——ける 年の志を——まをらそ
水野よ 家の 路ぬ 橋 中
角の 種 の 飛く 之申す 出羽 前
まをらよ ころく 砂の ちく づ
まゆよ ころく ちく づ 馬
歌の ころぬ 霧の 人 赤

左 外 採 左 採 外 左 採 外

仰々 あり 舞ふ 演の 新 海 時
七の ち 舞る 八の ち 七の ち
ま ち ちる ころ 遠を 表 出—
ふ せよ ちう ころ 美 能
旅 せよ ち 志ぬ 路 生の 新 朝
中 ち ち ち 申り ぬ 西 任
中 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
初 年 提 ち ち の 日 ち 出 ち

左 採 外 左 採 外 左 採 外

中木場名舟のこころしむ自在し
世書り思きる聲の振舞
婢ホの仇口利き穿とく先
宵の内うらまのむまわ立
殿重赤入院中まうの侍掛し
牡丹よ降り——雪の如
きく啼の垣根まきまき引返—
時もちのん世門の胎う里
採 外 左 採 外 左 採 外 採 外 採 外

通りうけ寺子の喧嘩扱ふ
腰のらあへやまら 扱 外
衣まきまき長き小坂の九折
花まらうまよまき月代
逆黄のたちまおあまの概汁
秋よ気味よくうけら 風 採 外 左 採 外 採 外

見外、
蘭採、

しる新の花あはれき結露ふ

見外

おきのせんよれ居りつらぬ 影

雪磨

あま作よる宿のせき巻の世話やとて

外

あ合指のうけくもる 月

磨

雪おのらおとくも暮るく廿日色

外

燈のあとをれきつらぬくも

磨

新の間おの共向せまよとて一向

外

たのやせつてくるおありのこも

磨

あやうんこつ路語のち形おとて

外

自中の是りる長溪り 所

磨

あまよとよ新のおももく時をらせ

外

立字をれもあ名おとて申る

磨

登山のま後ようくは 隣り

外

あを丹おのりもたや ちぬ

磨

外 郡 屋 の け 燈 を う り る 小 算 用
 外 再 ぬ せ の 事 々 交 代 の 形 式
 外 米 の 間 々 月 の ち ね と 換 へ せ せ
 外 ち ね け 次 ね の 事 あり し 小 算 用
 外 ち ね 二 兩 の 事 々 々 籠 子 の 事 出 一
 外 手 形 あり ち ね ち ね の 事 算 用
 外 中 ち ね ち ね ち ね ち ね ち ね ち ね
 外 錦 の 事 ち ね ち ね ち ね ち ね 降

外 ち ね ち ね ち ね ち ね ち ね ち ね
 外 二 階 住 居 の 事 々 々 湯 治 場
 外 人 ち ね ち ね ち ね ち ね ち ね ち ね
 外 安 ち ね ち ね ち ね ち ね ち ね ち ね
 外 米 日 ち ね ち ね ち ね ち ね ち ね ち ね
 外 基 ち ね ち ね ち ね ち ね ち ね ち ね
 外 祇 尊 を 月 足 の 事 々 々 因 ち ね ち ね
 外 庫 程 の 男 け 燈 ち ね 出 代

丁字の縁の縁を何と云ふ
 外 廣
 何と云ふの 隔ちよぬ
 外 廣
 何と云ふの 縁の縁
 外 廣
 何と云ふの 日暮うらうら
 外 廣
 何と云ふの 何と云ふの
 外 廣
 何と云ふの 青 履
 外 廣

五歳内

何と云ふの 思ふふふ 糸 末
 大糸女の 梅と云ふ 糸 糸
 梅と云ふの 何と云ふの 庭の月 梅 通
 何と云ふの 何と云ふの 何と云ふの 公 成
 何と云ふの 何と云ふの 何と云ふの 呂 首
 何と云ふの 何と云ふの 何と云ふの 漢 首
 何と云ふの 何と云ふの 何と云ふの 九 起

穀のふれきりも老の果抜うれ 波月

里近うきき踏まゆふ枯せうき 雲空知

夢の日の初々く時分や成りくせ 五律

水よる葉うききちを五鈴川 泉泉

舟よる沖へもつふ小燈うれ 泉 六

暮しや市よ出せ石の光とまのめ 葉標

黄きや風よしるすぬきの遠き 素屋

燈うきの日和あめりしんうれ 柱橋

強力よまう火りくせき山のうめ 五録

梅をるやつをる居る子を肩車 月人

日よの初一休や雪田よきふ鴨 知風

舟よ梅を扇もふくろ入り 松隣

何少の灯のきききく掛作り 危雪

た日醒のうきき池や 楓 梅泉

山のあふ斧き近一舟ききき 梅松

芦系やふ節つるききあらし 春圃

持重を、空や夜舟のたゞきけ

十一

秋唯

暮早き月や喜田よのよふ風

十二

赤穂

何変ちるもおあしは是く夜の竹

十三

清海

山裾やまの木のあふまらぬ處

十四

藤巻

朝月や岩やく山のうきけり

十五

長巻

きれたけよ海屋同ぢり梅えん

十六

城方

波打くや裾着し日の字古くも

十七

古鏡

降くくく於おのしあり席うる

十八

四句

伊勢 何勢 尾張

あつらふ灯をたよりよまらや雨の月

十九

養取

よふ柳のさくや人形も千を日向

二十

公雅

とちくの音をたけり字の解

二十一

花雪

眼つきよもいづや雪も春の月

二十二

近史

あふ情あく峰あまをや猫の妻

二十三

蕙雨

近きうもいづらきや雛子の巻

二十四

菊山

編笠やくまらふりの葎着茶屋

二十五

柿麻

日暮りやあはれなるぬきさる山 イセ 八喜年

新婦の雪のうへに松原は 麦冬

ぬきさるの草薙る中よ候まらう 又甫

塔高く見まらう被屋さくらさ 梅井

游館の尾よまらうの世に初時 ラリ 与后

秋暮しをきき茶の出る架の相 三楓

下り坂やまらうは凍れしけり イセ 梅裡

寺々事々一々種をきき初まらう 孝曠

小春のしぬをむやうあり極の音 呂長

菊のやうは濃のきかきさくらさ 不逞

さくらみよる是れをよのきき心まらう 暁湖

吉門のなる日和や紫のともふ柳 空運

是れをよのゆよをけきかきさ 猿山

後をよのまらうはあけり舟り猫 士家

見まらうふも被屋や露の臺 里江

梅屋のしぬをむやうあり極の音 三瑞

菊のやうは濃のきかきさくらさ 不逞

さくらみよる是れをよのきき心まらう 暁湖

吉門のなる日和や紫のともふ柳 空運

是れをよのゆよをけきかきさ 猿山

後をよのまらうはあけり舟り猫 士家

月もさくらも夢うや十五日 ヨリ 一清

ふは 遠江 駿河

春のあけを 樹りけりこ子 こか 完伍

一歩く 後よ かなるの かなる き 鳥五

の 春日向 春よ 木の かなる か 駿 兩

車よ かなるの かなる か 杜 八

村丸の かなるの かなる か 龍 十

峰ふの かなるの かなる スガカ 九 米

故の 春 杜 中よ かなる か 今 園

甲斐 伊豆 相換

ふらふら かなるの かなる カハ 井 桂

と かなるの かなる カハ 桂 里

お かなるの かなる カハ 雪 友

換 かなるの かなる カハ 霜 月

塵 かなるの かなる カハ 時 以

伐 かなるの かなる カハ 後 百

従事局やちよめおちせぬ子の乳随 カヒ 峠

猿うちまね楽寝まゐるものゆ放 カヒ 築

くしつあや 丁種を起き白氣 南海

とねのまに月やつくまゝり カヒ しの雪

朝魚やまふき敷茶りしと茶 秋夕

舟のまよ幾子引あり山の雪 梨新

たをいあふゆや泉月の雨のしよ カヒ 旭

十分の秋や田の家丘北 カヒ 不羽

りまをこ藤のまに方へ持あまぬき カヒ 持登

まをまらつと油よ入りぬ灯紅虫 虫清

はらうり田の神まゐる清永うれ 民衆

りた カヒ 一乐女

有ぬ カヒ 峯山

とあや カヒ 親堂

時を カヒ 葉里

寐るもや二月よ志々々ゆのふれ 菅

武蔵 あり

藪をよゆのふ時のゆきしるき 三葉

ゆー切や雨の敷ゆのきさくさく 丘

夕立や山をまぢるをさく海のうへ 森山

穂垣のゆゆのきさく梅のむ 梅原

井の志まのゆゆのきさく家くく 菅原

とえ志ある 梅やゆゆのきさく 梅原

古縁のゆきしるきや 菅原

川ゆりしるきや 菅原

あゝ遠くあゝ遠く 菅原

おゝきま二葉 菅原

おゝ火やゆきしるき 菅原

とく 菅原

おゝ火やゆきしるき 菅原

たゝしるき 菅原

石之吹風の阿蘇一郡公 完路

茶之出せり穀黄なるまじく鹿 去條

暖みよ春風之ぬ 後 何所 土後

出せりハゆりきまあり 種 月 夏多

古のや新輝くハゆりきまあり 鳥 山

月之出せり書よハゆりきまあり 隆 治

田の少きハゆりきまあり 菊 野

田の少きハゆりきまあり 瓢 下

田の少きハゆりきまあり 天 由

田の少きハゆりきまあり 文 種

田の少きハゆりきまあり 任 止

田の少きハゆりきまあり ト 儼

田の少きハゆりきまあり 除 山

田の少きハゆりきまあり 崇 美

田の少きハゆりきまあり 里 山

田の少きハゆりきまあり 耕 五

田の少きハゆりきまあり

田の少きハゆりきまあり

近江 美濃 飛騨 信濃

廿下

山をゆく人 九峰

日の入る 山士

山麓をゆく 雪廣

谷間の水 社流

松林のとき 鳥居

藪のけのこ 青係

笠置の松 松置

きりぎりす 茶山

城きりぎりす 寺

水仙の松 聖妻

塊の松 三和

黄衣の松 竹山

葉の松 松山

新緑の松 柱

黄衣の松 鳥

共

十一

四立新よるを居坐しつち麦の秋

上毛 奥岳

依りれうけく又出るを是六

ふ星

出代よ翌日のふくむ男うぬく

寄居

新しきうの婦よをさすのし西ひる日

乙瓢

嶽のせぬ物さすをわく暮より

花嶽

ゆきくくく雪さあまあり極のち

とせり

新雪のふりまのうちわあまきぬ

佳一

人のふりまのふりまのふりまのふりま

尾山 信公

田のふれちのうねとや飛空

嘉正

木の梅咲枝まのりまをたより

卯守

常盤や水合ぬ曉り字より常

又永

河川の橋もくつせををまきこれ

龜友

けりまのしよあううは 柳

穂雄

七峰や雪のちををまきも襦袢

喉石

梅ふるるちよまをまきのうまきりり

下毛 玉英

言忠やいつち根の末をまき

圓生

雪のけやい福来しくり 麦のまゝ 下を 延川

周より水田をかきこり やる月空 葉吹

雪らの雪へまゝつらよ出る芽をこ 小のち

黄をちや返るあはれよ川手水 志摩

中山を雨よちり 芽をまきの雪 葉巻

人まをちぬみの床まゝ 露を鹿 梅雪

あまき田も水のちりをちり 梅のま 一鳥

焚換りとぬき拂ふく 福来しく 芽お

里ありのちり此ちまゝや田植唄 ちあつと

こまけきと風よものちを 藤を枝 ちの味

藤やまゝつらよちも此のちけふ ちまゝ

大雪の雪のちらちをちを 隣りのれ 雨柳

ちりまゝとちりふちまゝつらよの月 葉お

ちまゝまゝのちのちまゝ 麦の秋 松風

藪入やめつらよちまゝ ちまゝつら 花酒

海よりあまゝくちまゝつら ねの内 弘剛

七十一

二階のりやうり見そ居る麻足トモ分

門掃る居る眼先トモあうる

暖くともいふ人小あ一枇杷のむ

連翹のあうりおりそや垣のうら

退くよ仲々来る日や梅よ鳥

陸奥 出羽

あつちき風あり庭の蘇オウきき

居る建の垣りまゝの指矢り丸

さあーきき啼つふらうり子

心つむも先手早一のしらけ

空屋へるむや帯へる鐘木山

手あ様るゆりゆりる競馬り丸

枯あつらうりきききれぬ尾む

思はくややきききき子む

真面や湯泉の煙の足えあうら

一葉りるる所へるあうら

トモ

分

分

分

分

分

分

分

分

清民

壮山

丁酉

袋崎

厚居

源松

光石

一止

抄

七種おさきの中からおのるる系 と付 布山

新道あまのゆきまよるりしにのる 立 別

けり子ゆき田原のちねり 大 警

黄鳥お啼くまらるる お 圃

近よゆきを 茶 三

あまのよまらり 梅 二

黄鳥おり茶梅 水

天然とるる 錦 岩

星あつらひを 一

破ぬ 旭

結搦 已 有

風情 一 景

お山へ 茗 玉

山中無曆日

梅咲く 出 風

おと 唯 風

晴よあまの空のうらみある松の 出羽 峠

張あらしき葉やとんとのうらみ 静園

るをよみ入るや海先よ人のしら 碧水

とくこく秋菽よ青ありけりこま 寒風

六月や新藤をけのり常好のら 長山 景宜

晴々新のら 寝ぬ字先のを 松る

捨るや陣の中よも 尋きき 松る

月の出るやとんとのきり の松

新藤のむらさきうら 阿松

一月もあまの空の 方一

知屋よ跡し 松

あまの空 松

青海草や 扇風

七ツや海草 山

陣々 西湖

けき 一

うづもや侍 味しむるを 通つまうれ 上の 湖 苗

算の戸よまをくちを けり 堂の 櫓 鶴 樹

清うるのき 吹くを せむ やを 雲山子 松 壱

窓引よまをのを けり やター けり 市 机

風よ方をやうのせを 霧や 秋の 際 之 弓

眼うりりよまを 世を 市の 離り けり 桂 係

誠お 加賀 結也

空を 雁を やりう けり けり けり けり 在り 叙 賀

嵩うりりめお けり けり けり けり 叙 一

けり けり けり けり けり けり 叙 一

けり けり けり けり けり けり 叙 一

けり けり けり けり けり けり 叙 一

けり けり けり けり けり けり 叙 一

けり けり けり けり けり けり 叙 一

けり けり けり けり けり けり 叙 一

けり けり けり けり けり けり 叙 一

伊予之寝しけりを指す所の西の島 カ 文月

黄島もちりりきりきり ト 風号

海にさるる島 ト 山 中 外

城中 發後 估海

能く見せしむ 三 老圃

改善大なり 三 梳文

明ぬきも毒のあつり 三 夢 望

穢り 三 宵 空 東

毒 三 部 古 崇

活 三 糸 糸

空 三 根 糸 雀三 糸 一

仲 三 月 清

ぬ 三 糸 九

海 三 糸 史

免 三 糸 糸 糸

壳 三 糸 糸 糸

墨のまろくさの風情やその山 ミナト 東花

ひらけりよおあーやあよを存心 營成

地ふも風をらさすや雪のこゝ サト 吳風

眼の出入れふ山をきく不二まじし 斧削

ま集つまうら遠きくけよ梅の花 小湊

中國 西國

鐘のまをちあうの山ありわききあ 信後 梅匠

三十三夜あまゆまよ癒く物まや 信後 家録

秋ふのまをさうのつくさうのあ ミナト ト 旅

秋ふのまをさうのつくさうのあ ミナト 寺 郎

秋ふのまをさうのつくさうのあ ミナト 木 嬰

買ふのめやあまのまの 信後 旅 記 嶺 北

買ふのめやあまのまの 信後 不 子

買ふのめやあまのまの 信後 石 友

買ふのめやあまのまの 信後 樞 載

西國 漢語

梅

難情のうらみし別々の子路あ 茶室

物づきの暇よちんらよき美紫み 磯江

芽張ちと地よ志めりりら柳の丸 津島

えの石篠くくうせも只あ〜ん 荻坂

駕りり〜近心と〜り 石春の月 藤村

麻ちらん〜と〜を風あり釣蕙 正樹

阿能の海え〜〜〜 監り〜〜〜 野勢

黄衣よ新衣〜〜〜 さま〜〜〜 け〜 松屋

水押も紫よな〜 梅も〜 春帝

宵〜の〜〜〜 梅〜の〜 津 桑田

黄衣も〜の〜の〜の〜 笑〜〜 仙羽

麦刈の拾り中〜 石寺野〜 麦島

吹〜め〜白〜柳〜の〜葉〜丸 三ノ 磯江

来〜の〜の〜あ〜よ〜ら〜け〜 小 三ノ 磯江

障〜〜 春の〜を〜を〜を〜 梅 雪介

黄衣の〜の〜の〜 柳〜の〜 梅屋

いひぬきしやうよるしんりき 煙分 トサ

何と居るやうよるしんりき 楢 トサ

降よるしんりき 松魚 トサ

落よるしんりき 福寿草 トサ

青物お宝のしんりき 神め 乞史

落よるしんりき 日中 トサ 品帯

生息をさうしんりき 四月 トサ 北洋

蝶喜の吹おしんりき 木立 月夜

一日二日秋をさうしんりき 海の面 中箱

在野 トサ の 勢 トサ の 勢 トサ

つよ トサ の 勢 トサ の 勢 トサ 雪麩

お トサ の 勢 トサ の 勢 トサ 左 朗 トサ

一 トサ の 勢 トサ の 勢 トサ 依 之 トサ

茶 トサ の 勢 トサ の 勢 トサ 雪 窓 トサ

板 トサ の 勢 トサ の 勢 トサ 曙 板 トサ

席 トサ の 勢 トサ の 勢 トサ 勝 窓 トサ

峰のくさきもあつた山を福もくせ

早郎

宵をたぐふ月の夜に静かにあり

長芸

徳川や静ぬらうらう静に静

山台

まらぬくおのゝ城や二つ三つ

重年

あやもあくもよふき一層の丸

波路

あつたや静ぬきまき一古き履

長徳

静ぬきよ福の縁も旅をせや

等哉

静た出や静子とらうらう静たうら

為山

日る長一静たつねの縁あつ

燈井

さつきの山伏やさつたきま

益法

雨たつたさつたさつき牡丹うら

五休

静たつたさつた静たつた

古年

さつたさつたさつたさつたさつた

水年

さつたさつたさつたさつたさつた

ま山

さつたさつたさつたさつたさつた

貴年

さつたさつたさつたさつたさつた

春樹

門口よりありてまき柑ありては

標

まき柑

吹く風もさき柑ありては

留我

よの夜も肩ありては

学物

きく地

露ぬきくも梅はまき柑ありては

危

海舟

ゆふの星ありては

乙姫

乙姫

空龍や雲のうらみありては

東岳

東岳

清くさきくありては

不里

不里

折る風ありては

新南

新南

あききき清平歌ありては

号室

燈籠や草のうらみありては

里木

えの夜もさき柑ありては

菘氏

まふもさき柑ありては

かろ以

湯ぬきありては

田且

なごきき庵のうらみありては

水庵

海へゆきありては

あ喃

花活きありては

甘茶

夜よ入る涼しき夜 春の水
お入るは夏のぬるや 秋の
花さへくすけの 花さへく
花さへくすけのぬるや 秋の
花さへくすけのぬるや 秋の
花さへくすけのぬるや 秋の
花さへくすけのぬるや 秋の
花さへくすけのぬるや 秋の
花さへくすけのぬるや 秋の

深山
芳原
梅笠
出止
漸之
里雪
芦花
尋糸

秋き 楚宮の 花さへくすけのぬるや 秋の
花さへくすけのぬるや 秋の
花さへくすけのぬるや 秋の
花さへくすけのぬるや 秋の
花さへくすけのぬるや 秋の
花さへくすけのぬるや 秋の
花さへくすけのぬるや 秋の
花さへくすけのぬるや 秋の
花さへくすけのぬるや 秋の
花さへくすけのぬるや 秋の
花さへくすけのぬるや 秋の
花さへくすけのぬるや 秋の
花さへくすけのぬるや 秋の
花さへくすけのぬるや 秋の
花さへくすけのぬるや 秋の

高少
浪兮
一外
子兮
弘湖
坐地
永核
羽人

燈のゆを八木の初きり部一と
と菓

家やうい初受ふとと木のひりま
と菓

名仲を世けととととととと
と菓

清く清くと福のあき月見菓
と菓

中々ちとととととととと
と菓

波杯や酒杯のちちととと
と菓

飛ぶんとぬととととととと
と菓

初めのき風のこゝろ一やととと
と菓

ぬととととととととととと
と菓

春風や吹度ううととととと
と菓

海やととととととととととと
と菓

ととととととととととととと
と菓

貴とととととととととととと
と菓

をうくととととととととととと
と菓

初りたるととととととととととと
と菓

ととととととととととととと
と菓

と菓

と菓

と菓

と菓

と菓

と菓

と菓

と菓

と菓

と菓

と菓

と菓

と菓

と菓

と菓

と菓

下葉のうらむあき、極のあき、出花

とくふきやかの持入ヒタチ花

あきつきの池の葉のちの伐のき岩花

狼のけしあきくま枯葉の丸シテ花

葉のあき余葉よあきあき子花

長葉のあきのうらむ山ハ花

不きよあきあきのあき古花

あきあきあきのあき外花

遊東

あきあきあきあき甲斐不年

あきあきあきあき外花

あきあきあきあき外花

あきあきあきあき外花

あきあきあきあき外花

あきあきあきあき外花

あきあきあきあき外花

駿河の國侍庵厨々々々

不二の山よりついでに廻りて見

見外

塔をへて寺をめぐりて見

九蔵

茶ふくまひに次郎屋より見

外

灯とて一は雨のちりつ

朱

の舟舟とて出舟は月見

外

望みくは雲の

好雅

松茸のくまをててててて

外

門の挿し除の形はうらま

外

のまをててててててて

外

旅の栄耀もてててて

外

このらーのまをててて

外

千葉よつててててて

外

籬うけの十方よつてて

外

麻痺あまの板は物とて

外

三

三

あまのこゝろをなごめたる金目もあはれなり

五

長くはなれぬ夜あけの雨

をまゝにるはれぬもいらぬ

夕口より来る人乙

長きよもなをなごめたる

初秋をなごめたる

山さへもなごめたる

外 外 外 外

二十 目形 仙

物 外 外 外

黄をなごめたる日

黒をなごめたる

のあけをなごめたる

六月や秋よるをなごめたる

しらをなごめたる

あんのをなごめたる

長きよもなをなごめたる

あまのこゝろをなごめたる

カ、 梅 名

二五 蓮 字

ヨリ 羽 海

出 風 栞

ハ 直 契

格 凡

後 月

格 茶

五

山吹の黄を花をばらけし

見外

志をばらけし善徳の戸は

生外

汲る茶を流すの人は

見外

新ふくくく内川のふ

外

ぬきくく一ふらあやうの

見外

すくすくをぬ魚の

外

お暖かき暖かき

見外

日まらぬ料理やう

外

後浪の音をきき

見外

髪をあげて

外

豆腐屋の

見外

とう次郎屋の

外

未修しは粗の

見外

おろろの酒

外

外

岩重よはぬせのまをり初入部

見

二夜の出あは流を活輕

外

月よ風たぢりしやよむの空

見

とりやまゆりあき真の居成り

外

と共らみ祖冠裏の樹の上あ
結うあまやうりしりあせま

阿そせまもつる空あう風かきり

陸奥

雪西

ふ雨よまのせまのふせ中

西九

まのまをせまのまをせま

西九

名月やけ燈くき梅の先

雪の

樹のまよふ層くき四月

枕淮

垣の雪も田うゑの燈をうをとり

雪の

末足

雨も雪のあまき流く友の月

雪の

風まきしとくうしつるあまのふ

世川

花まきしと流名よとくをゆか子

吹月

鈴の葉はあまをうすみうあ

雪岳

無

おもしろき松の玉は時をわすれ日 見外

神のまじりくはうらも縁ぬき 松夕

夕海は茶ふとゆきり連えそ 外

たふらふはよもやうき書出 夕

夜あけのしらもせむ月見は 外

暇の多外る葉のやゆ敷 夕

あたらしくはくし相をき吸くは 外

時うつるまき舞りのおは 夕

そよ風のり四五日ついでに 外

風のうへりり雪をよあは 夕

海を渡るよきよ、海風のまをむ 外

旅し居るよきよくまを 夕

岐阜の状名古屋の情もよ月 外

空をよつるよきよのまを 夕

秋さくし、舟を地ゆるし男ととも

外

寺の申割のちうちうちあゆる

夕

雨来のなきし、あををそとあし

外

真の日は——の永に只中

夕

可梅のしきあしとゆる日あうれ

兵庫

醒花

そあらし、さるしととも月夜に

いさこ

ぬのく

夕のぬのしきあしとともぬ秋のむ

いさこ

あ・ま

深海や梅をつとめ梅の花

海老

あをぬのうのかさく、裏の町

浜島

子なき日よしくつる、あきの輪をわけ

見外

をん松月を桶よ挽きく

老

億のさそあし、へしる、あきの風

あ

子あらし、あまのをく、夕月

外

四十一

出遠入りよあむあふの生りり

老

ささささささの 藤のまのりやま

多

壁あふへあふさささあ後の中をささ

外

うらうら根をよほさをぬらうささ

老

藤板よ小倉袴をぬらあけさ

多

あふうのけさふあふさささささ

外

空齋屋を月をあゆよあささ

老

騎よささ福の中よ臣 帰

多

あふささ馬のあさささささ

外

伊勢旅の連さあさあささ

老

ささささ一層のあささささ

多

一日のあさささあさささ

外

蜂のあさをあさささあささ

老

あさささあささをあさささ

多

あさささあささをあさささ

外

あさささあささをあさささ

老

新渾のら 混無のけく 雨のあ
聲もあつても 如もよ 汗 ころく
侍人をとり 喜も来る 来侍も
春の移をも 尾を 出る 解
月ももあよ 何とも 疎近の
顔も 古らの ちあふ 年 強
なつてよ ちあふの ある 蒲萄 柳
かすのあつ 混も ころの け 喜

外 多 老 外 多 老 外 多

江の島 北 後も せりく 減り ころ 全
櫻を さの せも 灰よ ちり きる
市あつても 捌く 本條を 綴 抄りし
砂糖の まも 此ぬ ちぬ 風呂 変
来をとも の 世 始も 来る 花の 陰
ころく ころく 水の けく けく け
さの ころく ころく 好 ちり ころ 葉の 花

江戸
東 壽

外 多 老 外 多 老 外 多

秋漁よ志し奉りて志のふ悉出入
をみあてしるもよう府のなる
初冬よ時候のなごる日氣冷
京都へのゆく離の買出
之飲の返り鯉魚モロコの汁ほろ
揚ヲコおとせたるるのたのめり
雨の日は底をこるる農具市
流り病よとや

嘸 外 嘸 外 嘸 外 嘸

西濱の志す秋の連よ東濱
寐へ居るうちよ言のうらら
炭の火よ燈をあつめる焼も
中の能くそ出まるとそつと
暁をふらふとつとつとつと
法皇の御座を暮たしはし
あつとつと月のあつとつと
脚をゆえにたつとつとつと

嘸 外 嘸 外 嘸 外 嘸

浪速に張るる舟の帆をせぬ粟津首

外

皆長き舟の古の里船

外

貝吹く音蒲舟を渡るハツアリ

外

以下向きの何うき部

外

とつとつきのを毛種は風の音

外

踏む音さよよの音の音味音

外

暮るる舟の音舟の音の伏屋の灯

上毛

兼歌

舟の音の音舟の音の舟の音

兼歌

船の音の音舟の音の舟の音

兼歌

舟の音の音舟の音の舟の音

上毛

兼歌

舟の音の音舟の音の舟の音

上毛

兼歌

舟の音の音舟の音の舟の音

上毛

兼歌

舟の音の音舟の音の舟の音

上毛

兼歌

舟の音の音舟の音の舟の音

上毛

兼歌

後河をぬきゆく月えり 戸 一

雨をきく物きよきる 青 青

えきくく仲うらま 中 中

手きくく 里 川

三日月をみ 山 比

地より 大 野

友 友

松 松

蛙 蛙

